

冬 鳥

京都午後二時三分登山陰線出雲行に乗った。丹波の山にぎらぎら太陽がういてまぶしい。優しい山が高さを競うでもなくつづく。福知山をでると、落ちる太陽めざして一直線に向かう。枯スキが真っ赤にもえて光ってとんだ。ずっと空ばかり見ていた。矢名瀬でまたのんきに停っている。こんもり山が沈んできた。裸の桜並木を川筋が白く光ってこれも静かに止ってみえる。暗くなつていく。米子に着くのは九時すぎだ。

冬の田んぼの中で野球をしていた。手づくりの布のボールを追いかけて稲株をびよんびよんよけて走った。みんな地蔵のようにつつ立って動かない。ボールを握ってほろびを手におしこんでまた投げた。沈んだ田がどこまでもひろがって投げたボールをさがして追った。停っ

梶山俊夫

た。窓の外に白い標識がうかんだ。八鹿^{やうか}とあった。ぼんやり車中の天井を眺めて、また田んぼに下りていく。名前も忘れた昔の幼友だが、みんなこちらに背をむけて西山の方を向いていた。みんな鳥がどつとどびだすのを待っていた。走りだすまでいっしょに西山を見ていた。次はどこに停るのか、ごそごと車内マイクの声に目をあけた。やっぱり空ばかり見ていた。空も沈んでまたねむくなった。

一枚の小さな古版画がこたつの上にあった。なまけもの二人の男が酔いざましに話していた。

……これはまたのんきな仕事だね。優しいね。

……欲もなんにもないな、まいったよ。

……海岸にころがっている流木だな。どうひっくりか

えしてもかたちになってるぜ。

……こっちを信じきっているんだ。よけいなものはみんなすてちまってるな。

……子どもの絵ていうのは宇宙なんだ。こいつは宇宙とであってるんだ。

……宇宙か、宇宙は冷静だぜ。

……冷静だよ。だからたいへんさ。

……であうにはつらいな。

……自信をもとうとするからつらくなる。

……はは、こいつはむこうがあつてこっちがあるというわけだ。平等なんだろう。

……そのとおり、平等なんだ。もともと大小なんかに

こたわってないんだ。

……おれだつてはなからこたわつてねえぜ。

……それが凡よ、こたわつてこたわつてこたわつてくたびれはててぬけていくんよ。

……それならトンネルといえ。

……おおトンネルよ、はいればいずれはだされるトンネルよ、ありがてえと思え。

……ありがてえや、こんなにわしらを楽しませてくれる仕事どこにあるか。

……まったくだ。

……これだつたらおれにもできそうだ。

……のぼせるな、死ぬまで生きて一つできるかできないかだ。

……死ぬまで生きるか。ほつ、こっちむいてわらつたら、お前さんならやれそうだって。

……こいつのりやがったな。

……そう、はいつくばつてころあいみはからつてびょんとビッキさまよ。

……ころあいはいよくねえ、まっことはいつくばつてやにこく生きなくちゃなんね。

……できると思えやそのうちできらい。

……そう、おもいこみよ。たっぶり時間はあつた。

……たっぶりないんだよ。お前さんもごくらくとんぼだね。

……いよよ、ビッキさまとごくらくとんぼのそろそろ

のお出ましか。

二人は立ち上がりからのそば猪口をふって置いた。とんぼの染付けがゆれた。風がでた。窓ガラスがカラカラになった。窓の向こうは小高い山がせまっていた。ちびた枯草をすっかりまだらにつけてこんもりこんもり岩肌のがぞいている。そこだけさながら華岳の絵そっくりになっていた。だれもしらない出来たての見事な景色になっていた。一羽の鳥が足早やに去った。クワアクワア、声ばかりが山の上のこった。

朝六時半わが家の小さな庭にでた。向かいの寺の櫓がすっかり紅葉をおえて、明けた空に梢の枝がピンピン天にはって吹かれている。その下を遠く数軒の瓦屋根がおしだまって日が登りきるのを待っている。さわったらカンカンと割れそうな白い空だ。今日もまたたらたらと一本の線をひくしかない。風に吹かれたら身をのぼし向きをかえじっと待ってまたのびて日に向いて夕べまで、一本の線はそんなに正直になれるものだろうか。

庭の蛙やトカゲや養虫やデンデン虫やおけらたちはもうどこにもいない。そっくり地の下でぬくもっているのか寄り合ってなにを話しこんでいるのか。ここからみる黒松ばかりが、師走のほこりをかぶったまま不機嫌そうに囁っている。しっかり葉をかかえこんで忘れものをした陰気な鳥のようだ。天に向かって思いきり深呼吸してはいた。冬鳥が空をぬけていくのにはまだ間がありそうだ。

一九七七年十二月 記

(絵本作家)

